

# 日本の野球界における独立リーグの誕生と展開

## —四国アイランドリーグに焦点を当てて—

藤井 大夢

キーワード：独立リーグ、四国、誕生、展開

### 1. 研究の動機

日本には、独立リーグと呼ばれる野球リーグが存在する。私が独立リーグの存在を知ったのは高校生の頃だったが、それまでは日本の野球のリーグは学生、社会人、プロの3つのステージしかないと考えており、他にもプロ野球を目指す環境があることに興味を抱いた。近年、独立リーグ出身の選手のプロ野球での活躍や、有名選手の移籍のニュースによって、年々存在感を増してきている。しかし、100年以上の歴史を有する学生野球や社会人野球と比較し、独立リーグの歴史はまだ浅いといえる。そこで、なぜこの時代に独立リーグが誕生し、どのように普及していったのかということに関心を抱いたことが本研究の動機である。

### 2. 研究の目的と意義

本研究では、日本における独立リーグ、その中でも四国アイランドリーグ plus に着目し、誕生、普及の仕方について解明することを目的とする。

また、独立リーグを通して野球における統括組織の歴史を研究することで、野球を含めた様々なスポーツの今後の発展の一助となることを本研究の意義とする。

### 3. 先行研究の検討

川西ら (2007) や清宮 (2016) の研究では、独立リーグの地域密着活動と観戦者との関係性について明らかにしており、森 (2014) の研究では、愛媛マンダリンパイレーツの CSR 活動に対する地域住民の評価について明らかにしていた。このように、四国アイランドリーグに関連する先行研究においては、リーグの経営や球

団の活動に着目したものが多く、リーグの創設の背景や、統一組織の変遷等について記述した研究が少ないことが分かった。

### 4. 研究の方法

本研究では、以下の時期区分に従って、四国アイランドリーグの誕生と展開の経緯を明らかにしていく。

1) 四国アイランドリーグの誕生に至るまで (2004年～2005年)

2) 四国アイランドリーグの展開、現状 (2005年～2018年)

1) では、四国アイランドリーグの設立構想が生まれるきっかけになった出来事や、創設者である石毛宏典、リーグのスポンサー獲得に向けた動きなどについて明らかにする。

2) では、リーグ開幕後の四国アイランドリーグの展開について、主に地域とのつながりと経営に着目して明らかにする。また、リーグの現状についても、米国との比較等を交え、述べていく。

雑誌、新聞等のメディアの記事、独立リーグ関係者の書籍、四国地方の議事録や県広報などの史料をもとに研究を行った。

### 5. 本論

#### 5.1 四国アイランドリーグの誕生

2004年当時の日本のプロ野球界は、一流選手のメジャーリーグ流出やスター選手の不在によって人気が落ち始めていた。また、プロ野球への人材供給源である高校野球、大学野球、社会人野球の中で、特に社会人野球が経済情勢の悪化で衰退し始め、有望な選手を生み出す環境が

減りつつあった。この状況を改善しようとしたのが、元西武ライオンズの石毛宏典である。アメリカにコーチ留学経験のあった石毛は、日米の野球における組織構造の差を痛感し、日本野球界の裾野拡大を目的として、独立リーグを作ろうと考えた。しかし、2005年にリーグの親会社である株式会社IBLJを設立したものの、構想から設立までの時間が短く、地域とのつながりが不十分だったことから、地元企業スポンサーや球場の確保に難航することとなった。最終的に、四国コカ・コーラボトリング株式会社とメインスポンサー契約を結び、合計1億5千万円の出資金を獲得し、2004年10月21日、正式なプロリーグとしての認定を受けた。日本独立リーグ野球機構の会長を務める鍵山誠も、当時のリーグ運営に対する認識の甘さを指摘しており、独立リーグの経営においては、「地域密着」が欠かせないキーワードとなっている。

#### 5. 2 四国アイランドリーグの展開

2005年に開幕した四国アイランドリーグの初年度の赤字額は3億円を超え、経営難に陥った。赤字状況を打開するため、2006年3月に、IBLJの事業部門だった4つの球団を、IBLJの100%出資により、子会社として法人化し、各球団に興行権を委譲した。当初、4球団がIBLJの事業所という扱いになっていたのは、リーグの構想段階から開幕までの期間が短かったことが原因であり、各球団と地元との接点の少なさが、地元企業スポンサーの出資をはじめとする資金調達不足に影響した。分社化により、地域密着度を高めて収益性の向上を図った結果、一定の成果を上げる球団も出るものの、四国4球団において経営格差が発生し、リーグ全体の黒字収支は、2019年現在も未達成である。

しかし、経営面の脆弱性とは対照的に、四国4球団は、年々地域とのつながりの強化に成功している。小中学校での野球教室の開催や、地域の清掃活動への参加、シーズンオフのキャリアサポート制度による地元企業での就業体験などの地域貢献活動の積み重ねにより、四国地方

における独立リーグが果たす役割を確立していった。地元の人々や企業、自治体との連携を強化することで、観客動員数の増加、スポンサーの獲得に繋げていく努力が、地方に本拠を置く独立リーグには不可欠であるといえる。

#### 6. 結論

四国アイランドリーグの誕生には、独立リーグを作って若者にプロ野球を目指す環境を与えることで、日本野球界の衰退を防ぐという石毛の思いが背景にあることがわかった。しかし、リーグの創設に至るまでは苦難の連続であり、特にスポンサー獲得についてはなかなか合意に至らず、スポンサー収入に大きく依存する傾向のある独立リーグの経営においては、2019年現在においても最重要の課題であるといえる。また、リーグ開幕直後の分社化によって、四国4球団間で格差が発生し、リーグ全体の黒字収支は未達成という現状である。独立リーグはすでに10年以上の実績を持っているにも関わらず、経営面においては未だに先行きが見えてこない。四国アイランドリーグをはじめとする独立リーグは、地方が直面する人口減少問題と向き合わねばならず、ビジネスモデルの転換が求められる時期に来ている。NPBとの連携強化、そして独立リーグ間の関係を「競走」から「共存」にシフトさせていくことで、独立リーグ全体の将来を見据えていくことが重要である。

#### 7. 今後の課題

本研究において、四国アイランドリーグの誕生、展開について研究したが、時代によって史料の量に偏りが出たことで、多角的な考察が難しい部分も発生した。そのため、リーグ開幕前の2004年～2005年頃の史料収集、他の独立リーグやスポーツの成り立ちやマーケティング方法との比較が必要であると考え、今後の課題としたい。

(指導教員 秋元忍)